

■ものづくりの原点へ



横田 勉*

「コンクリートから人へ」の安易なキャッチコピーが取下げられて参議院選挙が終了し、軌道修正されたかの期待を抱かせたものの、わが国における社会資本投資の在り方を示すべき基本政策は不透明で混迷を深めている。

振り返れば、戦後の復興期から高度成長期、バブル崩壊にいたるまでの急速な成長期に蓄積された社会資本のストック量には目を見張るものがある。平地が少なく急傾斜な山間部の多い狭隘な地理的条件を克服しながら、国土基盤整備に心血を傾注して近代化の礎を築いた先人の努力には改めて頭が下がる思いがある。わが国が第二次大戦後に成し遂げた急速で高い経済成長は、国土基盤整備の効率化に裏付けられた生産性の高さにあったともいえる。

歴史的には公共投資一般を悪者扱いとするような前述のキャッチコピーに批判されるような景気高揚策や短絡的政策が横行した時代もあったことは事実であるが、近年の悲劇は経済成長の鈍化とともに行き場を無くして放浪する金融資本の動向にあった。リーマンショックに見られた金融経済の膨張による無政府的な危険性が、実体経済と生産に打撃を与えて取返し不可能な社会経済状況を作り出した結果を真摯に反省しなければならない。成長下にある発展途上国における公共投資の経済効果と異なり、投資フロー効果が相対的に小さい社会経済状況のわが国にあっては、公共投資の一時的な経済フロー効果を期待するのではなく、真に必要な社会的資本を継続的かつ安定して整備していく社会資本ストックの形成の継続化が重要である。一般の社会的感覚はこれらの社会資本ストックを意識することもなくあたり前のようにその利便を享受しているが、ストックの維持管理・更新・改良を継続的計画的に遂行することの重要性を認識する機会は少ない。厳しい地形と自然条件下にある国土の現状にあって、想定を上回る自然の猛威の前に生命と資産が脅かされたときに初めて思い出し、ほころびを繕うような場当たりの対応に終始するようでは、生活と生命を守り、実体経済を支える安心・安全で効率的な社会資本を整備することはできない。いままで築かれてきた貴重な社会資本インフラを適切に維持しながら、時代に相応しい地球環境に配慮した効率的な社会資本整備を目指して必要な財源と技術を確保することが今後の日本の継続的発展の基本となることを改めて認識しなければならない。

いま一度基本に戻り、「ものづくり」から考えてみたい。90年代のバブル経済の崩壊以後、日本の製造業では生き残りをかけた価格競争に走ることで、生産コストの安い海外に生産拠点を移転し、生産にかかわる技術を放棄した結果、技術の空洞化によって競争力そのものが衰退していく懸念が指摘されて久しい。その一方で、近年の産業構造の変化とともに、ものを造る工学への関心そのものが薄れてきている社会的現象も根が深い。効率化を追求するあまり、「ものづくり」の原点を失った企業には、立ち戻る場所はなく「Made in Japan」の高品質さえも危ぶまれ、バブル崩壊以後の「空白の十年」といわれる時代が失ったものは計り知れない。建設業に立ち戻ったとき、国際化とIT化、生産性拡大といった時代の潮流から取り残された感のある業態は、幸か不幸か製造業でいわれるような空白こそ見あたらないが、近年の熟年技術者の大量定年による生産・施工技術力の低下は深刻な課題となっている。

第二次大戦後の復興期にその基礎を築き、高度成長期とともに発展したPC技術は、物流を支える基幹交通網の橋梁構造物や、重要な生産施設の建築構造物などを提供してきた。社会の成長とともに発展し、良質で安全・安心な社会資本ストックの構築のなかで洗練化されていったPC技術もこれを開発し発展させてきた世代が熟年を向かえるとともに、次の世代への技術の伝承が重要な課題となっている。

PC技術は創造的で魅力ある技術である。大規模な全体構造物から繊細な部材に至るまでコンクリートに与えるプレストレス量を自在に選択して必要な性能を能動的に与えることができる創造的な「ものづくり」の技術でもある。それゆえ若い技術者の柔軟な思考を魅了するとともに、現場条件に適応した柔軟な経験豊かな思考も必要とする。これからの維持管理の場面では、既存の膨大なコンクリート構造物そのものへの理解と補修補強技術として活用されるPC技術への理解も必要とする。

PC技術協会は、この創造的なPC技術のさらなる進歩と発展を牽引するとともに、その魅力を継承すべき次世代へ発信できる唯一の学術団体である。PC技術の伝承を通じ、次世代の人材の育成を行うことによって、この技術を支え社会に貢献する公益法人としての新たな活動が期待されている。

* Tsutomu YOKOTA：本協会副会長 オリエンタル白石(株) 執行役員 技師長